The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	持続可能性を目指すことによる綻び : ケニア西部における地域NGO
Author(s)	小川, 未空
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 318-329
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68224
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

持続可能性を目指すことによる綻び

ケニア西部における地域 NGO

小川 未空
大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

写真 1. マンゴーの木とトウモロコシとピーナッツの畑

名称：African Development and Emergency Organization（ADEO）とその支援対象地域であるジャム村（仮名）
場所：ケニア共和国ブシア（Busia）県（county）
活動期間：ADEO は 1999 年にケニアの NGO として認可され、2011 年にジャム村への支援を開始した。
活動内容：ADEO は、本部オフィスである「ADEO Nairobi」、フィールドオフィスである「ADEO Busia」、そして、海外支部の「アデオジャパン」によって組織されている。正規職員は、ADEO Nairobi に 6 人、ADEO Busia に 4 人である（2016 年 10 月）。

1. 支援を受ける

1.1　国際協力とケニア

「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」。国際協力の分野で頻繁に引用される格言には、消費財の提供よりも、人びとが自ら生活を営める手段の提供こそが重要だとする、持続可能性（sustainability）の理念が示されている。

本報告の舞台は、東部アフリカの赤道直下に位置する国、ケニア共和国である。ケニアは、独立以降の経済成長が進んでいる一方で、HIV/ AIDS の蔓延や、失業、治安の悪化などの深刻な問題を多数抱えている。ケニアには、これらの諸問題の改善にあたって、国連や開発援助機関からの大規模な援助だけでなく、草の根に活動を展開する国内外の NGO も数多く存在する。

筆者は、ケニアの地域 NGO である ADEO で、未来共生プログラムの「海外インターンシップ」を実施した。3 か月（2016 年 8 ～ 11 月）のインターンシップでの業務は、フィールドオフィスである ADEO Busia での活動が主であり、特に、日本のドナーから新規の援助が得られるような事業を計画することであった。事業の計画のために、ADEO が支援対象地域として選択するジャム村にて、そこにどのようなニーズや問題があるかを調べ、それらの解決のための計画を、ジャム村民および ADEO スタッフらと検討した。

1.2　ジャム村でのセルフヘルプの営み

ジャム村は、HIV/AIDS の蔓延を主要因とした貧困の連鎖に悩む地域である。ケニアの HIV 感染率は、1995 年に 10.5％に到達したのちに減少傾向にあり、2003 年頃から約 6％台で横ばい状態にある（RoK 2014）。ジャム村の正確な HIV 感染率を表すデータはない。しかし、ジャム村民の案内を受けながら村内を歩いたとき、半日のうちに 7 人の HIV 陽性者に出会ったことからも、村内の陽性者が多いことが分かる。HIV 陽性者や、その家族が抱える主な困難は、現金収入の不足である。HIV に感染した親世代は、体調不良を頻繁に引き起こすなどの理由で、安定して働くことが難しい。このため、衣食住の確保や学費の支払いなど、子世代への投資が容易には出来ない。

村内では、これらの困難に対処するために、2 つの自助グループが組織されている。ひとつは、孤児支援のための自助グループ（以下、孤児グループ）であり、もうひとつは HIV 陽性者同士の自助グループ（以下、陽性者グループ）である。孤児グループは、HIV/AIDS やその他の理由で両親を亡くした 18 歳以下の子どもを養育する保護者によって構成されている。陽性者グループは、HIV 陽性の当事者を中心として構成されており、スティグマや病気などに立ち向かいながら、陽性者としていかに生きるかを主題としている。

「自助」という言葉は、「self-help」の邦訳である。ここでの「自助」とは、個人がひとりで困難に立ち向かうという意味ではなく、同様の困難を抱えるひとで集まって助け合うという意味であり、日本語の「共助」に近い。ケニアでは、大小の自助グループを組織することは珍しくなく、不安定な収入状況にある人びとで組織するグループもあれば、同じ職業に就く者らで組織するグループもある[1]。人類学者の松田は、「セルフヘルプ世界は、けっしてきれいで調和的なも

のではない。それは善意と狡知が交錯する闘いの場」(松田 1999: 50)であると表現している。セルフヘルプは助け合いの場であるが、そこでは裏切りや争いなども起こりうる。以下では、セルフヘルプが基調とされている社会において、そのセルフヘルプと外部からの支援が、いかに交錯しているのか、その現場における一端を地域NGOによる活動の様相から描き出したい。

2. ジャム村の人びとの語り

まず、村内の陽性者の具体的な語りから、彼らを取り巻く困難と、それに対する人びとの向き合い方について考えてみたい。HIVへの感染と、誰かと共に生きることについて、孤独、恨み、希望、という3つの視点からみていく。

孤独について

ケビンさん(34歳、男性)[2]は、初等学校7年生で中途退学し、それ以降は農業などで生計を立てている。1999年に結婚し、妻と、2人の子どもと共に暮らしていた。しかし、数年前に妻が子どもたちを連れて出て行った。ケビンさんは、再婚を強く望んでおり、「孤独は人を死に至らせる」という。彼にとって、妻は孤独から脱するための支えであり、結婚は生きるための希望であった。一方、村内では、夫からHIVに感染し、そして寡婦になっている女性も少なくない。そのうちの一人であるシシリアさん(48歳、女性)は、夫がHIVに感染していることを知った後は、自身を守ろうとしたが、夫がそれを拒否したのだという。夫は亡くなり、現在は家庭の唯一の稼ぎ手として、3人の子どもを育てなければならない状況にある。

母子感染の事例はそれほどみられなかったが、夫婦間では両者ともに陽性のことが多い。そして、「孤児」が生まれ、孤児らは親族の誰かによって引き取られている。あまりにも多くのHIV陽性者が若いうちに亡くなっていて、この状況のなかHIVと共に生きている人びとは何を思うのか。子どもを持つことや結婚することが重視される社会のなかで、誰かを傷つけずに全てを手に入れるということが、いかに難しいか。彼らの語りに出会う前に読んだ論文には、ひとりで死にたくないからパートナーにHIVステータスを隠して感染させる、と書かれたものがあった。そのときは、そんなことありうるのか、と疑ったが、村内で少しずつ陽性者の人と話した後では、ありうるかもしれないと思った。それでも、あるいは、だからこそ、人びとは生きるために助け合っているのである。

恨みについて

リンダさん(32歳、女性)は、筆者が村内で話を聞いたHIV陽性者のうち、唯一の中等教育修了者であった。彼女は、2010年に妊娠を契機に結婚した。翌年、夫が頻繁に体調を崩すことから彼のHIV感染を疑い、自身のHIV検査に行った。当時、「検査に行く準備ができていなかった」夫は、リンダさんの「検査に付き添うことすら拒否していた」。夫は、リンダさんのHIV陽性が分かったあと、検査で陽性であることを知り、今では投薬を受けている。しかしその後、リンダさんは夫の家族から、HIV陽性であることを理由に離婚を強いられた。特に義母はリンダさんにつらくあたり、「義母はいつも、私のことを見るとエイズ、エイズ、エイズと言いながら罵」り、感染を恐れて近づくことさえ避けたという。リンダさんは、「彼女、中等教育を修了しているというのに」と笑いながら指摘し、「感染を恐れて近づくのを避ける」という義母のパフォーマンスを皮肉った。

教育歴が長いほど、HIV検査を受けている割合が高いが、HIVは、いつ、誰から感染したものかが判然としない点に困難さがある。リンダさんの検査行動は、彼女と夫が早期に投薬を開始する契機となった。しかし義母は、先にHIVの検査を受け、陽性だと診断されたリンダさんこそが、息子にHIVを感染させた原因だと考えていた。義母からの罵倒は、「息子にHIVを感染させた嫁」であるリンダさんへの否定的な感情に拠っている。HIVステータスを知る、ということは、単に自分自身の健康状態を知ること以上の意味を持っていた。リンダさんは、HIV感染によって離婚や差別などを経験しながらも、実家の両親が彼女を受け入れてくれていることに感謝し、6歳になる息子が「幸運にも」HIV陰性である、と満面の笑顔で話した。そして、以下のように話した。

> 私たちは自分の(HIV)ステータスを隠してはいけない。みんなが感染を避けたがるのは自然なこと。この病気をこれ以上広めないためにもステータスは隠さない。だってこの病気は治るものではない。一生共に生きていか

なければならないものだから。

希望について

HIVによる困難から学び、その脆弱性の連鎖を断ち切ろうとする人もいた。エバリンさん（36歳、女性）は、19歳で初等学校7年生を中途退学し結婚した。結婚当時は、彼女も夫もHIV陰性であったが、現在では夫婦とも陽性である。エバリンさんは、その原因を、「男性は知らないところで何かをしているものだから。感染は彼からだと思う」と話している。彼女は2007年にHIVの検査を受けに行ったが、その契機は、彼女の夫が「とてもひどく、どこにいっても妻を見つけていた」からである。

エバリンさんは、HIV関連のセミナーに複数出席し、自身が「HIV陽性になる前は知識がなかったが、陽性になってから学ぶ機会が増えた」と話した。そして、セミナーで得た知識を、母親として、子どもに伝える必要があることを強調した。また、エバリンさんは、4人の子どものうち、末の息子が全寮制私立初等学校の4年生であることを朗らかに語った。この学校の学費は、年間40,000Ksh（約45,000円）と高額であるが、家庭状況に関する個別の面接を経て、エバリンさんの息子の学費は免除されている。

エバリンさんは、HIVに関する知識を身につけ、それを子どもに伝えている。また、息子が私立初等学校の寮生であるのは、HIVという困難があるからこそだと話す。彼女はHIV感染後に、これに関わる困難を希望へと転換し、自身の子世代に繋げている。そして、彼女は周囲に助けられ、一人ではないからこそ強くいられると話した。一人ではないから「私は自由よ。陽性であると言うことができる。立ち上がって皆に伝えても良い、私はHIV陽性であるって」と話した。そして、このように前向きでいられる理由として、それまで使用していたシンプルな英語ではなく、スワヒリ語で以下のように話した。

> もし私が生きていれば、私は子どもの子どもに会うことができる。私の子どもが他の女性と結婚して子どもを作る。私は信じている。おばあちゃんと呼ばれる日まで、私は死なない。私は死ねない。

それぞれの語りは、人びとがいかに困難を解釈しそれに向き合っているかの一端を示している。陽性者グループの代表女性は、陽性者（HIV positive）であることと前向き（positive）であることを掛け合わせ、「Being positive」と向き合うことがグループの目的であると話した。次節以降では、この村をめぐる支援の状況と、それに伴って引き起こされている争いを読み解くが、争いを取り巻く人びとは、同じ「HIV/AIDS」というラベルのもとで、一人ひとり多様に生きている。

3. 援助現場で生まれた綻び

3.1　ADEOからの支援

ADEOは、1999年以来、難民らを主な対象とする緊急人道支援を担ってきた。最盛期にはケニアのほかに、ソマリア、ウガンダ、（南）スーダン、シエラレオネにおいても活動を実施していた。しかし、とりわけ2011年に勃発したシリア危機をはじめとする欧州・中東地域での緊急人道支援の必要性から、「アフリカでは、ADEOのような小さなNGOがUNHCRやその他のドナーから資金を得られなくなった」（Nairobiスタッフ）。そこで、ADEO幹部が医者であることからも、現在では保健医療分野に関わる事業を主として担っている。

ADEOは2011年から、制服や食料品、住居など、衣食住に関わる基本的な物資をジャム村に提供している。しかし、これらは不定期かつ一時的な支援であるため、数か月・数年後には老朽化や消費により同様のニーズが再発している。支援とは、ニーズの充足のためでありながら、同時に将来のニーズを生み出すという皮肉を持ち合わせている。ジャム村では支援の無限ループから抜け出し、彼ら自身で持続可能な収入が得られる仕組みづくりが求められている。

筆者は、ADEO研修生として村民らと出会った。初めて村に赴いたとき、彼らは「ADEOは良い組織だ。感謝している」と絶賛する。そのうえで、以前の支援の消費・老朽・不足を具体的に挙げ、さらなる支援の必要性を訴えた。しかし次第に、筆者のジャム村での滞在時間が長くなればなるほど、彼らはADEOへの不満を筆者に伝えるようになった。詳しくは後述するが、支援が届く、という期待が裏切られてきた不満や、支援プロセスに対する不信が村民らには

あった。しかし、不満や不信と同時に、「どうせ支援は来ない」という諦めも垣間見えた。ADEOスタッフは、ジャム村を「援助漬け（over-dependence）」という言葉で表現するが、「援助漬け」はいかに構築されるのであろうか。

3.2 「モノではなくカネがほしい」

「モノではなくカネがほしい」と、ジャム村の人は話す。以前、ケニアから日本に留学に来ていた友人が、誕生日の前日、SNSに「今年はお菓子じゃなくて、お金にしてほしい」という趣旨の書き込みをしていた。これに違和感を抱くのは、あくまでも主観によるわけであるが、仮に同じだけの金銭的支援を相手に期待するとしても、モノとカネの贈与はそれぞれ、関係性のうえでは違う意味を持つと思う。そのようなわけで、村民らのADEOに対する「モノではなくカネがほしい」という訴えを、快くは感じなかった。しかし、お金が欲しいという主張に至る事情を理解する必要がある。誕生日にお金が欲しかった友人も、ちゃんと投稿を読めば、そこに合理的な理由をみることが出来たからである。

ADEOから孤児グループに対するこれまでの支援は、モノを提供する支援であった。お金を渡したことはない。例えば2014年に、ADEOは孤児グループの児童へ制服を提供した。孤児グループは、ジャム村内の仕立屋に制服の採寸と裁縫を依頼し、仕立屋は児童一人ひとりのサイズを測った。一方ADEOは、それを知ってか知らずか、街にいる別の仕立屋に裁縫を頼んでいた。これにより「高価なうえに品質が悪く、児童と異なるサイズ」の制服が届いた。孤児グループからすれば、お金さえ貰えれば、孤児グループ員の信頼する仕立屋に依頼することで、安価に良質な制服を入手できたはずだ、とのことであった。

ADEOに話を聞けば、もともと採寸と裁縫の依頼はADEOの仕事であり、断りもなくそれを進めたのは孤児グループの方だという。また、サイズの違いに関しては、「サイズを測ってから制服を作り終わるまでに子どもが成長したのだから仕方がない」と反論した。少し無理があるが、ともかくも、そのうえで、ADEOとジャム村は親子の関係にあり、親が主導権を握るのは当然だという。両者の話には食い違いがあるが、その真偽は問題ではない。問題は、2016年も終わるという時期に、2014年に実施した支援に対する不満が今さら表出していることである。ADEOへの不満が、外部者である筆者を経由しないと伝えられなかったのは、支援するADEOと支援を受ける村民との間に、ある種の権力関係が生じていたからである。

ADEOは、援助や支援に対して少し冷たい考え方をする。少なくとも、筆者はそう感じた。ある日、ジャム村のHIV陽性者らが「私は（スティグマから）自由だ」と表現する一方で、最寄りの病院に薬を貰いに行っていない人が多いことに疑問を抱いた。最寄りの病院に行くことで交通費を節約し、そのお金で栄養のある食べ物を買えば良いのに、なぜ遠くの病院に行くのだろうか。Busiaスタッフと雑談しているときに、この疑問を投げかけたことがある。スタッフらは「どうせ互いに（HIV）ステータスは知り合っているのに、なんで最寄りに行かないんだ。薬は同じ。医者も同じ。質に違いはない。それで遠くの病院に行っていて、交通費が無いなんて言われても知らない」と答えた。筆者はこのとき、村民らが「交通費の不足を訴えている」とは伝えていない。筆者は、「なぜスティグマから自由だと話すのに、最寄りの病院に行かないのだろうか」と問うただけである。それでも、スタッフが即座に「交通費が無いなんて言われても」と呆れたように返すのは何故だろうか。かつて、そのようなニーズが訴えられたのかもしれない。しかし、スタッフらは「援助漬け」という偏見を前提とし、ジャム村との「親子関係」を作っているのではないか、と思わずにはいられなかった。

コミュニケーションの不足がもたらす妙な上下関係から、ジャム村民は「支援してくれる」ADEOを気遣わなければならない。だからこそ、筆者に初めて出会ったとき、村民らはADEOスタッフとしての筆者へ感謝を述べ、そして今日まで、ADEOへの不満の直訴を避けているのである。このため、不満が蓄積され、それが不信感を醸成していた。ゆえに、村民らは、「モノではなくカネがほしい」と訴えるのであった。

3.3 カテゴライズされる困難

村には、もうひとつの争いがある。それは、支援される側の内部で起こったものであった。既述のとおり、村内には2つの自助グループがある。筆者が作成した助成金申請書は、事業の目的やグループ員の積極性を理由に、孤児グループを主要なアクターとしていた。しかしこれに対し、陽性者グループから「不公正だ（unfair）」、「孤児よりも陽性者の方が困難な状況にある」などの不満が

写真2. 話し合いは木陰などで実施

寄せられた。陽性者グループからの不満は、ADEOからジャム村に対するこれまでの支援が、孤児グループにしか届いていなかったことを発端としている。このため、「私たちは陽性者なのに、なぜ支援が優先されないのか」との不満につながったのである。

孤児グループは、陽性者グループからの不満に対し、ADEOが孤児グループからの不満を「親子の関係」という論で一蹴したのと同様に、「親子の関係」という論を主張した。すなわち、孤児グループと陽性者グループは親子の関係にあり、親である孤児グループを介することなく、子である陽性者グループが支援を受け取ることはできないという論である。「親子の関係」という論は、多少の無理があるが、その使い勝手の良さによって多用されるきらいがある。しかし、そこには、本来存在しないはずの権力が集団間に生じてしまっているのである。

分かりやすいカテゴライズは援助の現場でよく行われる。例えば、「HIV陽性者」「孤児」「難民」「障害者」などである。このような「脆弱性」は、ラベルを貼りつけたように分かりやすい。ジャム村は、「HIV/AIDS」というラベルがあるからこそ、支援が届きやすい。Nairobiスタッフは、援助の最も難しいこととして、「需要はたくさんあるが、資源は限られている。誰が困っているか(needy)を見つけることが簡単ではない」と話した。

筆者は申請書の作成において、「孤児」や「陽性者」というラベルを理由に支援対象者を限定したくはなかった。ラベリングは、大規模な支援が効率性を求めるためには必要かもしれないが、草の根レベルではするべきでないと思う。なぜなら、困難の質は一人ひとり違っていて、カテゴライズできるものではないからである。孤児グループは、ラベルで支援対象者を限定していない。一応、「孤児」というラベルを掲げているが、しんどい家庭だと判断すれば両親が健在でも支援対象に含んでいる。また、18歳まで、と決めながらも中等学校に通っている生徒は18歳を超えていても支援している。このような柔軟性は孤児グループの特徴であったが、これに対し、陽性者グループは、その線引きが明確である。グループへの参加条件は、陽性か否か、である。もちろん、孤児グループの柔軟性は、身内贔屓を誘発するかもしれない。しかし結局のところ、「貧しい」人たちのなかにある、細かなしんどさの程度は、同じ村内に住む彼らが最も理解しているはずである。孤児グループは、「誰が困難か」を質的に捉えるうえで不可欠な曖昧さをあえて残していた。それは、意味のあることである。

4. ほころびをつくろう

4.1 持続可能であるための綻び

ADEOは、ジャム村を「援助漬け」だと表現する。ジャム村には「カネがほしい」というニーズがある。ADEO研修生であった筆者は、ジャム村が支援から脱却できるよう、持続的に現金が得られる仕組みを作る必要があると考える。そこで、申請した事業では、家畜(乳牛)の飼育による現金収入の持続的な創出と、その収益による就学継続の支援を目指した。これまでジャム村は、多少の不満をADEOに抱きながらも「モノをもらうことが最優先」であるため、表立った衝突を避けてきた。しかし、モノを配る支援と違って、長期的な利益を見越した新しい計画では、各アクターがいかに協力できるかが重要になった。

援助や支援が実施されるとき、そこに一種の権力関係が生じる。筆者が現場で出会った人びとは、それを「親子の関係」という言葉で表現した。モノやカネの配布であれば、そこに権力関係が生じるのは必然かもしれない。しかし、持続可能性を求めたとき、支援「される」側の持続可能性を信頼するためには、「される」側の本音や論理を知らなければならない。知るためには、それを邪魔する権力関係を取り除かなければならなかった。筆者はこのために、何度も村に通い、村民との信頼を築こうと努力したのである。

対して、自助グループ間の争いは、権力をめぐる課題というよりは、「どちらがより困難か」をめぐる争いであった。開発の現場では、人びとの困難さを簡単にカテゴライズするが、そしてまた、その困難が「最もどうか」ということを気にかける。たとえば、ジャム村が支援対象地域とされたのは、当該地域においてHIV陽性者が「最も多い」村だからである。そのとき、2番目に多い村、

3番目に多い村、あるいは一人しか陽性者のいない村があれば、それは見落とされてしまうのである。効率性が重視される場面においては、個々の困難よりも、その集団の特性に視点が向いてしまう。

「だれが最も困難か」という問いに、誰もが納得しうる答えを見つけることは簡単ではない。また、「最も多い」村を選択し、そこに介入したとしても、介入によって新たに不公平が生じることは避けられない。それでも「困っている人」を分かりやすく発見し、ドナーにアピールしなくてはならない現場では、支援を受ける対象者が、「選ばれる」。そして支援の実現可能性、人びとの「支援を受ける力」が問われる。ADEOがジャム村を選び、そして、陽性者グループではなく孤児グループを選んだ最初の理由は、孤児グループの「経営構造が組織されていたから」(Nairobiスタッフ)である。筆者の申請事業でも、孤児グループの積極性が見込まれたゆえに彼らが主要な受益者となった。そこに生じうる、非受益者からの不満は避けられない。それでも、支援を持続可能なものにするためには、一定程度、持続可能な基盤のある地域や人びとを選ばなければならない。しかし、実現可能性がある時点で、その場所は、ある程度はしんどくない。それは、確かに矛盾している。

4.2 繕う

持続可能であることを目指す場面において、排除される人びとが生じるこの必然に、どう向き合えばいいのだろうか。筆者は、陽性者グループから寄せられる不満をいかに克服できるかを考えた。至った結論は、特定のグループを対象にするのではなく、誰もが参加しうる公的機関をパートナーに迎えることであった。つまり、ジャム村の初等学校を、孤児グループに並ぶ主要な協力者として位置づけることを目指したのである。公平な資源の分配を、数字の上で実現することは、おそらく不可能である。どこにどのように資源を配るか、という数字上の公平性を目指すのではなく、その配り方に納得できるか、という人びとの感情に拠った公平性を目指すことにした。学校は、誰にでも開かれているため、誰にでも参加の権利がある。そして誰からも、学校教育は、必要で重要であることのようにみえる。

筆者なりに短い期間ではあるが、支援の実践について人びとと共に考え、「困難」とラベル付けられる人びとの、鮮やかで狡猾なさまに身を置く経験を得ることができた。それは、持続可能性が絶対善とされがちな開発援助の現場において、これを目指すゆえにこそ、切り落とされる人びとを生み出していることの経験でもあった。

ラーマネ(1996)は、経済上の数字をならすことを重視する開発実践を批判し、「外から押しつけられる物質的貧困に対する解決策は、当時者たちの貧困への倫理的かつ文化的取り組みのなかにしか見いだしえない」(241頁)と指摘している。共生社会が目指されるなかで、「貧困」などの様ざまな困難を抱え、社会的弱者としてラベリングされる人びとは、公的領域からの包摂なり支援なりを受容していく立場とされやすい。しかし、そのような響きの心地よい実践のなかでは、アクター間や個人間で、様々なレベルのコンフリクトが生じているだろう。それらに関心を寄せ、対立や協力が交錯するなかでこそ生み出される新たな価値を見いだすことは、共生社会の実現に肝要な営みであるはずだ。

注

1 このような自助グループは、労働社会保障省(Ministry of Labour, Social Security and Services)に登録すれば、支援を受けられる場合がある。例えば陽性者グループは、アメリカ合衆国国際開発庁(USAID)によるHIV/AIDS支援事業から寄付金を得ていた。

2 以下同様に、人名は仮称であり、年齢は聞き取り当時のものを指す。

(敬称略)

参照文献

松田素二
1999 『抵抗する都市——ナイロビ移民の世界から』岩波書店。

ラーネマ、M.
1996 「貧困」中川紘司訳、ヴォルフガング・ザックス編、イヴァン・イリッチ他著、三浦清隆他訳『脱「開発」の時代』pp.221-242、晶文社。(Wolfgang Sachs Eds. 1992. *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge as Power*)

Republic of Kenya
2014 *Kenya AIDS Response Progress Report 2014: Progress toward Zero.* Nairobi: National AIDS Control Council.